

2

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ほんとうは、三月にはまだ山の春は来ない。三月春分の日というのに、山の小屋のまわりには雪がいっぱいある。雪がほんとに消えるのは五月の中ほどである。つまり、それまで山々にかぶさっていた、氷のように冷たい空気が、五月頃になると、急に北の方へおし流されて、もう十分あたたかくなっている地面の中の熱と、日の光とが、にわかには働きたして、一日一刻も惜しいような山の春があらわれ、^{また}又たちまちそれが夏にかわってゆくのである。東北の春のあわただしさは、リンゴ、梅、梨、桜のような、いわゆる春の花の代表が、前後する暇もなく、一時にぱつと開いて、まるで童話劇の舞台にでもいるような気を起こさせる。これは四月末のことであって、三月にはまだその自然の花々は固い木の芽の中にねむっているのだが、雑誌の三月号といえ、もう誰でも春の話をするにきまっているし、^①また事実、上野公園あたりの彼岸桜の蕾は毎年きまつてほころびはじめる。日本の国は南北に長いので、季節がこんなにずれていて、^①おかしいようでもあり、又それがおもしろくもおもえる。北の方ではラッセル車が出るというのに、南の方では桃の花が村々にのどかに咲く。

自然の季節に早いところとおそいところはあっても、季節のおこないそのものは毎年規律たたくやってくる、けっしてでたらめでない。ちゃんと地面の下に用意されていたものが、自分の順番を少しもまちがえずに働きはじめる。木の芽にしても、秋に木の葉の落ちる時、その落ちたあとにすぐ春の用意がいと生まれ、しずかに固く戸をとじて冬の間を待っている。まったく枯れたように見える木の枝などが、じっさいはその内部でかっぱつに生活がたのしくおこなわれ、来年の花をさかせるよろこびにみちているのである。^②あの枯れ枝の梢を冬の日に見あげると、何というその枝々のうれしげであることだろう。

さて、山の三月は雪でいっぱいだが、それでも、もう冬ではなくて春の一部にはちがいないので、雪は降っても又目立って解ける。零下一〇度程度の寒さはすくなくなり、屋根からは急にツララがさかんにぶらさがる。ツララは極寒の頃にはあまり出来ず、春さきになって大きなのが下がる。ツララは寒さのしるしでなくて、あたたかくなりはじめたというしるしである。ツララの画を見ると寒いように感じるが、山の人がツララを見ると、おう、もう春だっちゃ、と思うのである。

(高村光太郎「山の春」による。)

(注1) ラッセル車Ⅱ除雪用の車両。

(注2) 春だっちゃⅡ「春なんだ」の意味。

一 ――線部①「おかしいようでもあり、又それがおもしろくもおもえる」というのは、どのようなことについて述べたものですか。次の1から4までのうち、最も適切なものを一つ選びなさい。

- 1 東北の三月は雪も降るが、リンゴや梅、梨、桜のような春の花も一緒に咲きはじめるということ。
- 2 山の三月はまだ雪でいっぱいだが、桃の花だけは山の村々にも咲き誇り十分に楽しめるということ。
- 3 同じ日本の三月なのに、桜がほころぶところもあれば、雪が積もっているところもあるということ。
- 4 雑誌の三月号では春の話を取り上げているけれど、実際は日本ではまだ花が咲いていないということ。

二 ――線部②「あの枯れ枝の梢を冬の日に見あげると、何というその枝々のうれしげであることだろう。」とありますが、筆者がこのように感じた理由を説明したものととして最も適切なものを、次の1から4までの中から一つ選びなさい。

- 1 まだ冬であるにもかかわらず、春が来たと勘違いした木の枝が芽を出した様子を見付けたから。
- 2 枝々が冬の間^{すべて}の活動を止めていることを、ゆっくりと休んでいるようだと感じ取ったから。
- 3 葉が全て枯れ落ちてしまったことを、枝々が身軽になってすっきりしたように受け止めたから。
- 4 枯れたように見える枝も、内部では花を咲かせる準備を生き生きと進めていると想像したから。